アジア・アフリカ地域研究 第19-2号 2020年3月
Asian and African Area Studies, 19 (2): 207–234, 2020

書　評

小山田英治.『開発と汚職―開発途上国の汚職・腐敗との闘いにおける新たな挑戦』明石書店，2019年，344 p.

石川雄介 *

途上国の「汚職」に関する研究は，主に1990年代以降，盛んに経済学・政治学・法学・人類学・開発学等の視点から世界各国で学際的に研究が行なわれてきた．一方，日本での「汚職」に関する研究は，ニュース等で取り上げられる割に進展しておらず，市民の「汚職」に対する認識も各国に比べて低い．このような「汚職」研究の停滞を背景に，90年代以降，世界各国では当然に議論されていた汚職の削減のための理論的・実証的な研究は日本では見逃され，未だ論文等に反映されない状況が続いていた．本書は，この経緯をふまえ，途上国の汚職の問題，測定方法，さまざまなアクターによる反汚職の実践と課題についてまとめられたものである．汚職に関する研究に海外から携わっている者として，本書を紹介したい．

まず，本書の第1章「開発途上国の汚職・腐敗問題とは」では，汚職の定義，途上国での汚職の要因と影響，職種別（警官・教育）の汚職の具体的な種類について，著者のインタビュー，ニュースソース，NGOや政府のデータ等から得た，具体的な事例をもとに議論が展開されている．第1節では，学術的な定義と「汚職」という言葉の各国（とりわけ東南アジア諸国）の語源を記述し，汚職には一定の類似性がありながらも文化による違いもあることが指摘されている．続く第2節から第8節では，（ⅰ）汚職の現状と，その汚職が地域，企業，国家，国際社会にもたらす社会的及び経済的な影響をはじめとするさまざまな影響，（ⅱ）政治経済，法，文化的な汚職の要因，（ⅲ）政策の立案から実施に至るまでの過程で起こる，談合，偽造，資金流用等の汚職の種類についての説明を行なっている．「ストリート・チルドレンが路上でものを売ったり物乞いをしている裏には警察官の暗黙の了解があり，子供たちは場所代として，売り上げの一部を彼らに支払っている」（p. 37）という汚職の現状についてのインタビュー結果をはじめとした，著者のフィールドワークによる結果が随所に述べられていることで，これらの文献レビューの内容が，単なるレビューに留まらない学術的貢献をしているといえる．

著者は，続く第2章「開発途上国の汚職・腐敗対策への新たな変化と実証研究」で，反汚職に関する1990年代以降の理論（プリンシパル＝エイジェント理論等）についてのレビュー及び，汚職と経済成長，地方分権，民主主義，貧困等の関係性の研究レビューを行なっている．また，この章では，汚職の測定方法についても取り扱っている．最も一般的に使われている汚職認識度指数（Corruption Perception Index）及び世界ガバナンス指標（World Governance Indicator）から，近年開発された指標である公共清廉性指数（Index

* 中央ヨーロッパ大学政治学研究科

of Public Integrity）まで，合計 14 の指標が著者により簡潔に紹介されている．

第 3 章「国際社会，市民社会，民間企業による反汚職取り組みの役割と活動」では，初めに国際社会における対策として，USAID，DFID といったドナー諸国側の対策及び OECD 外国公務員贈賄防止条約，国連腐敗条約を紹介している．続いて市民社会の取り組みとして，ネットワーク構築，市民及び公務員に対する反汚職への価値観の形成を促す活動，研究活動等が事例とともに紹介されている．また，民間企業の贈賄対策についても焦点を当て，経済産業省の外国公務員贈賄防止指針，日弁連やトヨタによるガイドラインの策定，グローバル・コンパクトへの参加についてまとめられている．

反汚職を実践する残りの大きな主体である政府の汚職削減への取り組みについては，第 4 章及び第 5 章で取り扱われている．これらの章ではジョージア，インドネシア，フィリピン，リベリア，ルワンダの 5ヵ国が事例として取り上げられている．この分析で，著者は，たとえば，インドネシアの反汚職機関は，事前の期待に反して与えられた強大な権限を利用して多くの汚職者を逮捕することに成功し，市民社会及びメディアとの協力により，その権限を維持することに成功していると主張する．それに対して，フィリピンでは，反汚職に関する制度が複数存在するにもかかわらず，その制度間の連携がうまく行なわれていないことが，反汚職政策の失敗の原因のひとつであると主張している．

第 6 章「開発途上国が直面する現状と問題点」，最終章「過去からの教訓と今後の課題」では，まず，汚職対策機関及び国際条約をはじめとした政策及び，「『一つのサイズで全てに適応させる汎用的モデル（one-size-fit-all）』的な万能型手法」（p. 255）となりがちな国際援助の実情が，汚職に関する援助の実情として指摘されている．そのうえで，著者は結論として，汚職対策の成功及び失敗の要因について考察し，「汚職・腐敗と戦うためのリーダーシップと政治的意思」（p. 272）が重要であると主張して本書をまとめている．

ここまで，本書の構成及び内容を概観してきたが，本書の貢献または課題として何を指摘することができるであろうか．評者として，以下の 1 点を貢献としてあげ，同時に 2 つの課題を指摘したい．まず，貢献として，著者のフィールドワークの調査結果，ニュースソース，NGO や政府のデータを日本語で提供した点をあげたい．これまで，汚職に関する研究は主に外国語文献に頼らなければならず，日本語での研究は極めて少なかった．この点を，NHK のドキュメンタリー等，日本語でも参照できる資料とともに，本書の中で提示したことの意義は非常に大きい．また，汚職に関する研究を行なう評者として，政策及び研究者の索引に加え，国ごとに参照できるようにも索引が用意されていることは，今後の研究において有意義であると感じる．

しかしながら本書には課題も含まれている．まず，本書の構成と主張についてである．著者も認めているように，本書は「今までの

研究成果の集合体」（p. 286）にすぎず，著者の分析の中には，情報を集めただけと思われるような箇所が，随所にみられる．

著者は文献レビューの中で汚職の測定方法についてまとめているが，多くのこれらの記述がそれぞれの指標の単なる説明に終始していることは，今後の研究の課題といえるであろう．たとえば，市民の報告をベースとした指標でも，隠れた汚職を計測できないといった欠陥があることがこれまでの研究により明らかにされている［Sequeira 2012］．しかし，本書にはこうした記述はなされていない．これらの異なる指標をどのように補完的に活用し本研究を進展させていくかが，反汚職に関わる研究者の今後の課題であろう．

これらのレビューの問題に加えて，理論的な分析が，最新の研究を十分に反映したものにはなっていないことも指摘したい．著者が汚職削減のために主張している多くの事柄，たとえば政治的意志・専門性・資金など（p. 274 ほか参照）は，前述のプリンシパル＝エイジェント理論が提言している内容に近いものである．しかしながら，この理論は，近年の研究では批判的に検証されている．たとえば，公式な制度（formal institution）だけではなく，家族・民族・派閥等の非公式な制度（informal institution）による反汚職対策の有効性に対する影響についての研究［たとえばHellmann 2017を参照］が近年行なわれている．こうした理論もふまえ研究を行なうと，さらに深い分析を行なうことができるのではないかと感じる．これらの課題については，今後の著者及び他の研究者によるさらなる多分野からの調査・研究がなされることを願いたい．

ここまで，本稿では，小山田英治氏による新刊本の内容及び批判的検討を行なってきた．本稿の後半で検討したように本書は課題も含んではいるが，これらは本書の価値を決して損ねるものではない．著者が政治学・法学・経済学・開発学と幅広い研究者に読んでもらいたいと願っているように（p. 14），汚職に関して専門的に研究していない研究者にも，是非一度手に取ってほしい一冊である．

引　用　文　献

Hellmann, O. 2017. The Historical Origins of Corruption in the Developing World: A Comparative Analysis of East Asia, *Crime, Law and Social Change* 68(1-2): 145–165.

Sequeira, S. 2012. Advances in Measuring Corruption in the Field. In R. M. Isaac and D. A. Norton eds., *New Advances in Experimental Research on Corruption*. Bingley, UK: Emerald Group Publishing, pp. 145–175.

小川道大．『帝国後のインド―近世的発展のなかの植民地化』名古屋大学出版会，2019 年，448 p.

長尾明日香 *

本書は，戦後，深沢宏から小谷汪之へと継承され，発展した本邦におけるマラーター王国，マラーター同盟（以下，「マラーター勢力」）研究の後継者による待望の処女作であ

* 大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター

る．著者，小川道大は出版時 38 歳と若手だが，本書は小川がプネー大学留学中（2007～12 年），およびその後に収集したマラーティー語公文書を基礎とした労作である．小川が同大学に提出した博士論文および既出 7 論文を整理，発展させたものであり，その焦点は（現インド・マハーラーシュトラ州）プネー市東南東 150 キロほどに位置した農村地帯，インダプール郡（パルガナ）におけるマラーター同盟の統治機構，特にカマヴィスダールやジャーギールダール（「ジャーギール保持者」），郷主，郷主代理という，国家と在地社会との間に位置した「中間層」に当てられている．しかし本書は地方史ではなく，政治史，外交史，統治機構，徴税・司法・治安維持・軍事等の諸制度，ローカルなレベルにおける政府金融，流通ネットワーク等の幅広いテーマを扱っており，高度な学術的独創性と論旨の一貫性，トピックの多様性，入門書としての配慮を兼ね備えた稀有な一冊である．インド近世・近代史分野における新たな必読書の出版を喜びたい．

本書は三部構成である．第一部はマラーター勢力時代，第二部はイギリス東インド会社（以下「EIC」）領拡大期，第三部は植民地化後を主に扱っている．

全体を貫くテーマは，中世（ムスリム政権支配期）から植民地期初期までの統治制度等の継続性と変容（「後継国家」としてのマラーター勢力），かつて「暗黒時代」と称された 18 世紀における経済システム，およびマラーター同盟の地方支配における中央集権化とその推移といえよう．これら全体を小川は，近年，インド史学界で活発に議論される，18 世紀再評価論（「18 世紀問題」）と同様の問題関心に基づくものとする．

以下，章ごとに本書の内容を概観する．ただし本書は各章において広範なトピックに触れており，以下，記述する以外にも多くの議論が展開されていることを付記する．

第一章はシヴァージー没後のマラーター勢力の政治・軍事史であり，王位継承権戦争や，バージーラーオ 1 世（在位 1720～40 年），バーラージー・バージーラオー（在位 1740～61 年）両宰相期における勢力拡大戦争，その背景にあった政治的状況等を詳述する．初期のマラーター勢力にとり対ムガル朝関係は重要であり，初代宰相バーラージー・ヴィシュワナートは，ムガル朝との交渉で成果を上げ，強力な政治的実権を獲得した．政治的実権の多くを失った王家（ムガル朝皇室やマラーター王家）の象徴的権力が維持される「権力の二重構造」が，18 世紀インドにおける政治権力の特徴だったと小川は指摘する．また同章は，S・ゴードンによるマールワー研究で著名な，マラーター勢力による，比較的少数の騎兵による農村部掠奪から始まる四段階の軍事征服パターンを詳述する．

第二章は，パーニーパットの戦い（1761 年）後のインダプール郡における徴税，刑事・民事司法，治安維持，軍事，社会的慣行等，諸分野における中央政府や武官，カマヴィスダール，郷主の分業関係を詳細に描く．宰相政府が郡に派遣する文官，カマヴィスダールは多様な権限を有していたが，村落社会への彼の介入能力は，在地の下級役人の

独立性等により制限されていた．また小川は，断定を避けながらも，カマヴィスダールが「ポートフォリオ資本家」的性質を有していたと論ずる．

第三章は同郡におけるジャーギール制の実態を描く．ジャーギールダールを選定するのは中央政府だったが，具体的にどの村をジャーギール村として当該ジャーギールダールに付与するかを決定するのはカマヴィスダールだった．ジャーギール村付与の際，カマヴィスダールは，具体的税目や村名を明記した「軍事規約」をジャーギールダールに発行しており，村落社会にジャーギールダールが無制限に介入できない仕組みが整えられていた．

第四章は，徴税記録をもとに，同郡の村落社会を分析する．深沢や小谷の研究により本邦でもなじみ深いバルテー職人等，職商集団も描かれる．グジャラート地方出身者が，町役場やジャーギールダール，住民に対する短期金融等を通じ，地方財政や徴税に既に関与していたという指摘は興味深い．

第五章は，17 世紀初頭から第二次アングロ・マラーター戦争（1803～05 年）に至るインド亜大陸における EIC 領拡大と，インド西部における EIC の行政区であるボンベイ管区とマラーター同盟との間の外交・軍事関係を詳述する．近年，歴史学界において，近世・近代アジア世界とヨーロッパ外交秩序との相互関係への関心が高まっているが，インド諸勢力と EIC との間で締結された軍事保護条約等の条約規定が詳述された本章は参考となろう．

第六章は，1802～03 年にプネー州を襲った，ホールカル軍による掠奪や干ばつがインダプール郡に与えた影響を詳述する．同郡は，マラーター勢力の中央部に位置しながら，1763 年にもニザーム軍による掠奪を受けていた．小川はこの 19 世紀初頭の時期を，同郡におけるジャーギール制の縮小期と捉える．

第七章は，同郡の流通ネットワークを，1811～12 年の通関税記録等をもとに解明する．近世デカンの農村部は人口密度が低く，村落面積が広大だったことで知られるが，86ヵ村からなる同郡に関所が 30 ほど存在し，その各々が通関税を徴収したというのは，やや煩雑な印象を受ける．これに関しては，小川が指摘するように，関税が慣習的な額だったことで負担が軽減されたのかもしれない．通関税徴収は請負制だったが，徴税の実務は世襲の事務員に委ねられていた．よって宰相政府が通関税徴収の実務に関与する余地は限られていた．一方，通関では商人の名前や居住地，課税対象商品，商品の移入元・移出先，運搬方法等，多くの情報が収集され，政府により，飢饉の前兆への対応等に活用されていた．商業上の紛争に関する司法手数料も関所で徴収されていた．さらに小川は同郡における流通ネットワークを複数の手法で分析する．

第八章は，植民地期初期における統治制度の再編や，藩王国形成過程等を描く．植民地化以前におけるマラーター勢力諸侯間の内部対立は，ボンベイ管区における多数の藩王国形成に帰結した．同章はパトワルダン家によ

る藩王国経営も詳述し，マラーター同盟期のジャーギール経営と植民地化後の藩王国行政との間の継続性と差異を指摘する．

最終章である第九章は，ボンベイ管区におけるライヤットワーリー制導入の経緯等を描く．小川はライヤットワーリー制導入に対し，マラーター同盟期における中間層が抵抗勢力となったとする．強力な中間層が存在した旧宰相政権領辺境部では同制度の導入は遅れた．一方，植民地化直前に有力な中間層が姿を消したインダプール郡は，ボンベイ管区において同制度が最初に導入された地域となった．宰相政府の支配力が強力だったマラーター同盟中央部と，19 世紀前半の植民地政府による実効支配の強度との関係を指摘する小川の論は刺激的であり，今後，多分野の研究において検討の基礎となるのではないか．

本書は優れた研究書であるが，研究途上の出版という側面もあると考える．たとえば，本書では，第四・七章を除き，カーストへの言及が比較的少ない．これは名前からカーストを判別することの困難等によるものだが，結果として，マラーター同盟領では多分野においてチットパーワン・バラモンが優位だったというV・D・ディヴェカルの指摘に対する本書の立場がややみえにくい［Divekar 1982: 438–441］．またカマヴィスダールの「ポートフォリオ資本家」的性質や，ティルタンカル・ロイの軍事財政国家論への評価等，本書において研究途上と言及されている重要なトピックは多い．今後，さらなる研究進展に期待したい．

最後に，小川が本書において「18 世紀問題」を重視しながら，マラーター勢力軍による掠奪を詳述したことを評価したい．マラーター勢力による掠奪戦争による国土荒廃や政治的不安定化は，18 世紀を暗黒時代とみなすかつての歴史観の中核であり，「18 世紀問題」関連の研究はその影響を限定的と捉える傾向が強い．しかし軍隊による村落や町の掠奪は，それ自体が戦争史や国際法史等，多分野における学術的関心の対象である．第二次世界大戦中の日本軍における現地徴用が国内外で批判され続けていることを考慮しても，インド史における研究動向を紹介し，さらなる研究発展の糧とすることは有用であろう．

引 用 文 献

Divekar, V. D. 1982. The Emergence of an Indigenous Business Class in Maharashtra in the Eighteenth Century, *Modern Asian Studies* 16(3): 427–443.

Matthew J. Walton. *Buddhism, Politics, and Political Thought in Myanmar*. United Kingdom: Cambridge University Press, 2017, 226 p.

小畑徳光 *

2007 年 9 月 24 日，ヤンゴンの街頭はサフラン色に染められた．ガソリン価格の値上げに端を発した市民による抗議活動は，瞬く間に大規模な反体制運動へと発展した．そのとき銃口の矢面に聳立していたのは，教義的

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

には本来，峻烈な政治運動からは縁遠い存在であるはずの仏教僧である．さらには，2012年以降，仏教僧を中心とした反ムスリム運動やヘイトスピーチがミャンマー各地で猖獗を極めるようになった．実存的な不安を排他性によって埋め合わせる彼らの行為もまた，一見，上座部仏教的な理念とはまったく相いれないように思われる．では，このような現象をいかに理解すればよいか．

著者マシュー・ウォルトンは，こうした現代ミャンマーの政治的ダイナミズムを捉えるためには，ビルマ仏教徒の政治思想の根底にある「道徳世界（moral universe）」を理解する必要があると提起する．「道徳世界」とは，人々が世界で生起したことを解釈し，意味づける際の枠組みとなる「世界観」を指し，上座部仏教的な道徳的因果律―縁りて起こること―をその原理としている．そして，本書の目的は，「道徳世界」がいかなる要素から構成され，ビルマ仏教徒の政治思想の形成にどのような影響を与えたかを考察することにある．以下，各章の内容を概観しよう．

序章では，本書の位置づけが示される．従来のミャンマー政治研究は，政治と宗教の関係を「道具主義的」―観察可能な現象にのみ着目し，その背後にある政治アクターの「世界観」の解明に力点をおかない―に分析してきた一方で，本書は，政治学を人類学，宗教学，歴史学などの領域と接合しながら，表層的な政治現象の背後にある人々の「道徳世界」にアプローチすることを通じて，政治と宗教の関係を再考する点に特色がある．

第一章「政治史の概要と政治アクターの素描」では，19世紀半ばから現在に至るまでのミャンマー政治史の概要を記述し，政治アクターについての基本的な情報と，背景となる出来事を簡単に整理している．

第二章「道徳的世界の構成要素」では，ビルマ人の政治思想を条件づけている仏教的世界観を構成する諸要素を説明している．五悪（*nga pa thila*），無常（*aneitsa*）・苦（*dhoukkha*）・無我（*anatta*），四諦（*dhoukkha ariya thitsa*），縁起（*kan*）・功徳（*kutho*），そして世間（*lawki*）／出世間（*lawkouttara*）などの概念群が織りなす「道徳世界」は，因果の法則である「縁起」をその中心的な原理とする．そこでは，あらゆる現象には原因があり，それぞれの主体は過去の行為の帰結として現在の状況を引き受けることが定めとされている．

第三章「人間本性と政治の本質」では，ビルマ人が政治的権威を理解する際に依拠する2つのパーリ語経典（*Aggaññ a Sutta* と *Cakkavatti Sutta*）の教えと，彼らによるその解釈を論じている．2つの経典が示すことは，人間は生来的に自己をコントロールすることが不可能な欲望に満ちた存在でありながら，同時に，自らを拠り所として精進すれば究極的な自由の境地に到達することが可能であるとする両義的な人間観である．こうした人間本性の両義性こそが，ビルマ人の政治的権威に対する捉え方―政治的権威がなぜ必要か，あるいは制限されなければならないか―を規定している．

第四章「秩序と自由―政治の目的」では，前章で明示された2つの仏教的な人間観を

さらに展開しながら，政治の目的に関して，ビルマ仏教徒にみられる 2 つの主要な議論を検討している．第一は，人間は欲望に支配された不完全な存在であるという消極的な前提ゆえに，パターナリズムに依拠した権威の創出を強調し，秩序を優先する立場である．第二は，人間は渇愛を捨断し解脱を実現することが可能であるという肯定的な前提ゆえに，政治の目的を自由に置く立場である．ビルマ仏教徒にとって，政治的・経済的抑圧からの解放を目指す世俗的な意味における自由と，苦を滅尽して輪廻的な生存状態からの超越を志向する仏教的な意味における自由は，思想的に重なることが指摘される．

第五章「何が〈政治〉か，何が〈参加〉を意味するか」では，ビルマ人仏教徒にとって「政治参加」とはいかなるものかを考察している．ミャンマーでは，仏教的な価値観として，人間が生来的にもつとされる道徳的な欠陥を理由に，大衆の政治参加の有効性に関して懐疑的な言説が流布しており，一般に「政治参加」という語彙に否定的なニュアンスがともなう．他方で近年，僧侶や市民社会のアクターの間で，その概念を拡張したり，再編成したりする議論も生まれている．こうした議論によれば，道徳的によいとされる個人の行為が集団にとってもよい結果を生む，という「縁起」の法則が前提となり，ひとりひとりの道徳的な実践が効果的な政治参加になる．

第六章「規律・権利・道徳―現代ミャンマーにおける〈デモクラシー〉」では，ビルマ仏教徒の間で用いられる 3 つのデモクラシーの概念を説明している．第一は，与えられた領域のなかでふさわしく行為するという含意をもつ「規律（*si kan*）」概念に依拠した「規律化されたデモクラシー（Disciplined Democracy）」，第二は，個人の権利や自由を尊重するリベラルな理念を基盤とした「権利に基づくデモクラシー（Rights-Based Democracy）」，第三は，仏教用語を通じて意味づけられ，その道徳的な価値や実践が反映された「道徳的デモクラシー（Moral Democracy）」である．ミャンマーの政治アクターはそれぞれが，体制側であれ反体制側であれ，これら複数の観点からデモクラシーを理解しており，3 つの概念はいずれも仏教的な理念や価値に基づいて言及される．

終章では，「道徳世界」はビルマ仏教徒が政治を捉えるための枠組みとして今後も機能し続けるだろうという展望が述べられる．

本書の評価については，まず，最も卓越した点として，特殊と普遍，差異と類似性といった二項対立をめぐるバランス感覚のよさが挙げられる．ミャンマーにおける仏教徒の人口は，85～90 パーセントと推定されており，なかでも総人口の 60～70 パーセントを占める多数派民族のビルマ人にとって，仏教はアイデンティティを形成する重大な要素のひとつである．本書が対象とするのは，このビルマ人に信仰されている「ビルマ仏教」であり，それは，アラカンやカレン，モンやシャンといったミャンマーに暮らす他の民族が帰依する仏教とは同一のものではない．さらにいえば，たとえ同じビルマ人仏教徒であっても，教義に対する理解や実践の諸相が

異なる場合もあり，したがって，その「世界観」を一般化するには困難がつきまとう．ここで重要なのは，本書が，ビルマ人仏教徒の政治思想がある程度共通の「道徳世界」に条件づけられていることを主張すると同時に，個別の教義や実践の広がりによって生じた「道徳世界」の多様性，およびそれによりもたらされる政治思想の複数性をも抜かりなく記述している点にある．こうした差異と類似性の両極を股にかけるバランス感覚ゆえに，本書は特殊主義と普遍主義の双方からの批判を巧みに回避しながら主張を展開することに成功している．

つぎに本書の欠点は，「世界観」と「言説（言明）」の接続において，僅かながら恣意性がみられる点にある．具体的にいえば，「道徳世界がビルマ人仏教徒の政治思想を条件づけている」という本書の中心的な命題を論証するために，著書はビルマ人仏教徒の政治的言説をイシューごとに例説していく手法をとるが，その言説が実際に，「道徳世界」を通じて形成されたものであると解釈する必然性がいささか脆弱な箇所がある．たとえば，本書のなかで最も重要な位置づけを与えられている言説のひとつに，「デモクラシーとはタヤー（*taya*）に従って行為することである」という，2011 年 1 月 31 日に，ある僧侶がヤンゴンのダウンタウンで実施した公開説法における言明がある．「タヤー」とは，法，正義，真実，説法，ブッダの教えなどを意味する多義的なビルマ語で，仏教的な含蓄のある用語である．著者は，その言明を例示することにより，ビルマ人仏教徒はデモクラシーという概念を仏教的な「道徳世界」の枠組みを通じて理解していると主張する．

ところが，上記の言明は，説法の場という空間的なコンテクストを勘案すれば，「デモクラシーとはタヤーに従って行為することである」，だからタヤーに従え，というブッダの教えの正当性や現代的射程を主張した言明でもありうる．説法の文脈として，この発言のまえに，タヤーについての説明が続いていることや，「デモクラシーはブッダの教義である」と言明されていることを鑑みても，このような解釈は十分に可能である．また，2011 年の民政移管にともない，政治的規制が緩和される数ヵ月前に発言されたという時間的なコンテクストを勘案すれば，タヤーという社会的に価値が容認されている宗教的シンボリズムを用いることで，デモクラシーの正統性を訴える言明としても解釈しうる．以上のような解釈の可能性を加味すれば，上記の言明は，ビルマ人仏教徒によるデモクラシーの理解が仏教的な「世界観」に条件づけられていることを示すものである，とただちに帰結することはできない．つまり，文脈的に多義的なある言説が別様に解釈しうるにもかかわらず，なぜほかでもなく「その解釈」を採用するのかという論証の必然性が十分に説明されていない．そこでは，はじめから，著者の主張に還元されない解釈の可能性が捨象されているのである．

とはいえ，以上の部分的な批判は，本書の価値を減ずるものではない．本書はミャンマー政治を理解するにあたり必読の文献であることはいわずもがな，ミャンマー研究を超

えて，政治と宗教の関係に関心をもつ他地域の研究者にとっても，一読の価値があるだろう．

中谷哲弥.『インド・パキスタン分離独立と難民―移動と再定住の民族誌』明石書店，2019 年，503 p.

井上登紀子 *

本書はイギリスによる植民地支配の終焉に伴うインド・パキスタン分離独立によって難民となった人々の民族誌である．本書はこうした人々に注目し，「分離を伴った独立が，人々にどのような影響を与え，何をもたらしたのか」（p. 19）を明らかにすることを目的としている．そこでは，著者が「公的な制度をかいくぐりながら生きてきた分離独立難民の経験や生活世界，地域社会の構築などについて，分離から現在に至るまでの長いスパンの中で扱うことこそを眼目とする」（p. 37）と述べるように，難民を法的・政策的な存在として扱う国家の視点，短期的な緊急援助の対象として扱う人道支援の視点からは見落とされてきた難民の姿や生活世界が描かれている．

本書は序論，結論を除く 3 部 10 章から構成されている．以下，本書の内容を概観する．

まず序論では，本書の問題意識を明らかにするとともに先行研究を概観している．分離独立に関する研究は，政治に注目し分離の原因を探ることを目的としたものが中心であり，分離によって生じた社会変化はあまり注目されてこなかった．著者は，分離独立難民に関する先行研究の課題として，都市部のボドロロクと呼ばれるホワイトカラー層を扱ったものが中心であること，また，サバルタン研究の流れをくむ研究では，個々人の語りや内面に注目するあまり，彼らの生活空間や地域社会の構築に関する視点が欠落していることを指摘している．

第 1 部では，分離独立に至る歴史過程と南アジアにおける難民問題の概要，分離独立難民の流入動向と政策について論じている．植民地支配下の政治過程でヒンドゥーとムスリムのコミュナルな対立が深まり，独立に伴う分離によってインドとパキスタンという 2 つの国家が誕生した．その際の最大の課題は国境策定であった．元来ムスリムとヒンドゥーはインド全土に混在して暮らしていたが，両者が「連なって」いる地域に国境を引くという作業は混乱や暴力的事態をきたした．また国境の両側では人口の 3 割に近い宗教的マイノリティが生まれ，難民が発生した（第 1 章）．分離に伴う難民は大きく分けてパンジャーブ～西パキスタンとベンガル～東パキスタンの 2 つの地域で発生したが，その動向と難民政策は大きく異なっていた．西パキスタンからの難民の移動は短期間で完了したとされるのに対し，東パキスタンからの難民の流入は不均衡で長期にわたったうえ，土地不足のため再定住には困難が伴った（第 2 章）．

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

第2部は，西ベンガル州・ノディア県の農村に住む東パキスタン出身のヒンドゥーの難民／避難民を主な対象とし，移動や再定住のプロセス，その後の展開について考察している．人口の大多数が東パキスタンからの移住者で占められ，大半を低カーストが占める調査村では，1950年代初頭までに移動した農民カーストのマヒッショや漁民カーストのマロをはじめとする分離独立により分断された旧ノディア県出身者と，1970年代まで移動が継続した東ベンガル(現バングラデシュ)のフォリドプル出身の農民カーストのノモシュードロという2つの大きなグループが存在していた（第3章）．著者は，調査村における主な再定住パターンとして，政府によるリハビリテーション，流出したムスリムと流入したヒンドゥーとの間の個人的な「財産交換」，自力での再定住を取り上げ，再定住の形態について土地問題に着目しながら論じている．著者はここで，再定住のための戦略と移動の時期や距離，カーストの要素との関連性を示している（第4章）．

調査村での再定住後の地域社会の構築と難民の自己規定には，「フォリドプルのガンディー」と呼ばれたソーシャル・ワーカー，チョンドロナト・ボシュと住民による協働が深く関わっていた．ボシュとの協働はノモシュードロの人々に，自分たちこそが何もなかった地域を開発した開発者であるという意識をもたらし，その精神はボシュの名を冠したNGOの活動により現在まで受け継がれている．著者はこうした活動に政治性だけには還元できない難民の行為主体性を見出している（第5章）．また，著者はノモシュードロの間で信仰される宗教や村の宗教行事の事例を分析し，難民集団間の相互関係を論じている．ここでは，同じカースト内でも宗教・文化意識に多様性があることや，カーストを準拠枠とする移動の時期や記憶にもとづく宗教・文化的価値の差異が，宗教行事だけでなく難民集団間の関係にも反映される様子が描かれている（第6章）．

第3部では都市部の事例としてデリーの東パキスタン避難民コロニー，チットロンジョン・パークを取り上げている．今日「ミニ・ベンガル」と呼ばれるこの瀟洒な住宅地は，農村の事例とは対照的に，東ベンガルの故郷を失ったボドロロクと呼ばれるホワイトカラー層が中心となった主体的な運動により建設された．自らをベンガル語の表現で「国によって拒否された」(p. 295)「難民」ではなく「住処を奪われた／失った」(p. 295)「避難民」とする自己認識に彼らの行為主体性は立脚しており，地域の開発が進むにつれ「避難民」や「東」といった要素が後景化するなど自己認識は変容していった（第7章）．ただし，世帯調査からは，分離独立以前から教育・雇用の機会を求めて移住したボドロロクだけでなく，分離に伴う暴力から逃れてきた「難民」に近い者を含む多様な人々から成ることが明らかにされ，彼らの東ベンガルの記憶についても考察されている（第8章）．

デリーの難民／避難民コミュニティの生活空間の構築においては，政治的陳情，住民サービス，医療福祉，教育などさまざまな活動を行なう「ベンガル人」のアソシエーショ

ン的連合が重要な役割を果たしており，そのネットワークはチットロンジョン・パークの領域を超えて広がっている．一方で，数世代にわたるベンガル地域外での居住やデリーのコスモポリタン的環境の影響を受け，人々のアイデンティティは単なる同質的「ベンガル人」ではなく，状況に適応的で重層的，かつ選択的なものとなっている（第 9 章）．また，ベンガルで重視されるドゥルガ・プジャ（ドゥルガ女神への祭礼）に焦点を当て，デリーにおける近隣関係の構築について論じている．ドゥルガ・プジャは独立以前からベンガル人コミュニティで行なわれてきたが，近年のプジャの肥大化や市場主義の介入による変容を受け，住民の間にはプジャを「親密さ」「伝統」「パーソナル」といった観念により再定義する動きもみられる．一方で，不動産開発と地価高騰はベンガル人の流出を招いており，デリーの都市化や再開発は「ミニ・ベンガル」に揺らぎを与えている．

結論では各章の内容を概観し，序論で示した大きな問題意識との関連で本書の意義を改めて述べるとともに，デリーの事例にみられる言語や世代間の問題など，海外移民と国内移住者が抱える問題の類似性を指摘し，都市部における移住者への視点をインド社会研究の新たな課題として提示し，論を閉じている．

本書の重要な意義は，分離独立に伴う難民の長期的な社会変化を，生活基盤や社会関係の構築，社会奉仕活動や宗教祭礼をとおした自己認識の変化などさまざまな角度から，また長期的なスパンで明らかにした点である．特に興味深いのは，こうした変化を論じるにあたって，地域社会での活動で発揮される難民の行為主体性に注目し，彼らの自己規定が「難民」から「社会奉仕者」や「地域の開発者」（第 2 部），「避難民」から「デリーのベンガル人」（第 3 部）へ転換されていく過程の記述・分析である．ここではホスト社会による「統合」や「共生」の政策によるものとは異なる，難民自身による生活空間の構築の様子が描かれているだけでなく，時代の変化とともに「難民問題」という狭い枠組みには収まらない多様な社会変化が生じる様子が明らかにされている．

注文をつけるとすれば，分離独立難民に対する国家の処遇についてさらに言及があれば良かった．分離独立によって引き起こされた暴力や，これを機に難民となった人々の経験した困難の背景には，Chatterji［2012］が論じるように両国での「市民」の定義が曖昧なまま国境が引かれたという歴史的経緯があった．しかし，その後本書で論じられているように，政府による支援が不十分ななかでも難民たちが新たな土地での生活基盤を築いたり，「デリーのベンガル人」になることができたのは，インド政府が彼らを（宗教的帰属にもとづいて）統合の対象とみなしていたからだと考えられる．これに対し，Chowdhory［2019］が扱うタミル難民（スリランカ）やチャクマ難民（バングラデシュ）は，インド政府から統合の対象とみなされなかった．受け入れ国での権利が保障されないことから，彼らはインドに帰属意識をもたず，自発的な帰還へと向かった．こうした対

照的な事例が示すように，「難民」の発生はネイションという擬制的な概念に支えられた国民国家の擬制性に帰結し［加藤 1994］，また難民の帰還への意識や自己認識も国家が誰を「国民」とみなすかに規定される．元来域内移動が盛んであった元英領インドの諸地域で生まれた「難民」は，独立―国家樹立のプロセスにおける「真正な国民は誰か」をめぐる対立や交渉のなかで生まれたのであり，彼らの辿った軌跡の多様性はその恣意性を浮き彫りにする．国家の恣意性によって一方では国籍を否定され，他方では国民として統合されることになった分離独立難民は，難民を「国家を必要とする者」とみなす国民国家制度を前提とした難民問題の議論に大きな問いを投げかける存在である．

引　用　文　献

加藤　節．1994．「国民国家と難民問題」加藤節・宮島喬編『難民』東京大学出版会，1–20．

Chatterji, J. 2012. South Asian Histories of Citizenship, 1946–1970, *The Historical Journal* 55(4): 1049–1071.

Chowdhory, N. 2019. *Refugees, Citizenship and Belonging in South Asia: Contested Terrains*. Gateway East: Springer Singapore.

古澤拓郎．『ホモ・サピエンスの 15 万年―連続体の人類生態史』（叢書・知を究める　15）ミネルヴァ書房，2019 年，274 p.

寺嶋秀明 *

21 世紀という時代に入ってはや 20 年が過ぎたが，前世紀前半における悲惨きわまりない世界大戦の反省のうえに打ち立てられた平和主義，国際協調，共存共栄などの戦後世界の理念や秩序が大きくくずれ，世の中は分断と対立，扇動と盲従，知恵よりも武力・金力，巨大な格差や貧困の蔓延，人権の空洞化，多様性の否定といった，かつて通った道へと戻りつつあるようだ．日本でも世界でもさまざまな分野で人と人を区別し差別する風潮が蔓延し，まちがった歴史理解や科学知識に基づく差別，自己中心的な差別，そして空虚な言葉のやりとりが横行している．本書はそのようなあやうい時代へ一石を投ずる人類学的啓蒙書である．

著者は「あとがき」で次のように語る．「この本の趣旨をあらためて考えてみたい．人間は同じ一つの生物ホモ・サピエンスであり，それが多彩な姿をしめす連続体＝スペクトラムなのだということを書いてきた．これによって私たち人間はお互いに差別はできない連続した存在であるし，異なる文化や異なる身体形質を持つことと，それを理解し尊重することの大切さを示してきたのである」（p. 243）．たしかに上記のような時代だから

* 神戸学院大学人文学部

こそ，著者のいうように，われわれホモ・サピエンス自身についての生物学的ならびに社会・文化的に正しい理解がとりわけ必要なのである．

ホモ・サピエンスは遺伝的にはきわめて均質性が高い生物である．それは生物学的形質ばかりではなく，根本的な社会性としてもそうである．一方，地球上の人々の生態や社会・文化は表面的には千差万別である．どうしてそうなのか，それを解明するのがさまざまな人間の生き様に興味を抱く人類学者の仕事である．そして，地球上のありとあらゆる地域に足を運び，長期の参与観察という調査手法を用いて，現地の人々の生活の隅々や心の中まで覗き込んできた．その多くの人類学者が一様にびっくりするのは，外見的にどんなに異様であっても，また，とても自分たちと相容れない暮らしと思っても，彼らとの間に心身の深みにおける共通性を見出すからである．

著者は気鋭の人類生態学者で，その研究は，公衆衛生学，医学，保健学，遺伝学などの理系の方法論に軸足を置きながら社会的・文化的面にも気を配り，さまざまな自然環境・文化的環境への人の適応のあり方を探求している．オセアニア地域を中心にフィールドワークにもとづく研究を重ねており，多くの論文や著作がある．著者自身による魅力的な HP もアップされているので，ぜひ訪問していただきたい〈https://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/furusawa/〉．

本書は以下にみるように序章および終章と 6 つの章から構成されており，第 1 章から第 6 章には 4 ないし 3 つの節が設けられている．

序章　スペクトラムで人類の歴史を見る
第一章　人間の起源から
1　人間の壮大な旅と個人的なコンプレックス
2　肌の色では何も区別できない
3　体格の違いは適応なのか
4　人種という区別を考える
第二章　生物としての私たち人間
1　性別を連続的に見る
2　フェロモンで異性を惹きつけられるか
3　食人習慣とプリオン病と進化
4　オランダ飢餓の冬とエピジェネティクス
第三章　文化の基底
1　生業と食べ物による適応
2　個人主義化した社会のうつ病
3　東アジアの人は酒に弱いのか
4　自然をみて季節を知る暦
第四章　行動の進化
1　なぜ男は狩りをするのか
2　伝統社会は自然を保護してきたのか（1）最適採食理論から
3　伝統社会は自然を保護してきたのか（2）保全倫理から
第五章　病気の起源
1　感染症と適応
2　適応が病気のもと（1）肥満と糖尿病
3　適応が病気のもと（2）塩と高血圧
4　マラリアと DNA
第六章　現代の課題

1　人間における格差の始まり
2　「喪われた女性たち」は差別か適応か
3　持続可能性は「可能」か―二つの島の物語
4　世界食料危機とアジアの食文化
終章　永遠の生命・一つの連続体

近年なにかと社会の話題となっているテーマが盛りだくさんである．昔から論じられているが解決していない問題，論争的テーマも少なくない．早急に対応が必要とされる社会的に重要な問題もある．それらに挑む第一の武器として著者が手にしているのは，現代において急激な進歩を遂げてきた遺伝子解析によるデータである．

さまざまな遺伝子がとりあげられている．人の肌の色を決める遺伝子，性（sex）をつかさどるXY遺伝子，ネアンデルタール人やデニソワ人とサピエンスの共通遺伝子，フェロモンや異性選びにかかわる遺伝子，ニューギニアの奇妙な風土病を引き起こす異常プリオン遺伝子，アフリカサバンナでの古代人の生活や，戦争時の飢餓という逆境体験に起因する倹約遺伝子，飲酒適量を決める遺伝子，離乳後も乳を飲めるようにする乳糖分解酵素とそれに関連する遺伝子，生業文化と共進化する遺伝子，マラリアやうつ病にかかわる遺伝子などである．さらに一卵性双生児における表現形の相違や，飢餓経験者の子孫に出現する形質にかかわるエピジェネティクスという現象も紹介されている．

遺伝子とは直結しないが人間の適応や進化を考えるうえで興味深い話題もいろいろとりあげられている．動物一般とは異なり，閉経後の女性がその後もかなりの期間そのまま人生を享受する現象をめぐる祖母仮説や，狩猟採集民たちは日々どのように食物を探しているのかを活動効率の計算から説明する最適採食理論，あるいは食糧危機と肉食問題，和食における獣肉忌避の問題などである．

もっともひとつひとつの話題にあてられている紙幅は多くはない．著者によると，本書は月刊『ミネルヴァ通信「究」』に2015年4月から2年間，24回連載されたものを加筆修正したとのことである．各章各節でとりあげられている多くの話題とその現代性，語り口のなめらかさ，解説のテンポの良さなどは，大学生／大学院生を相手にした講義を念頭に置いたものということで理解できる．評者自身，本書を読み進めながら，この話題は自分の授業でも使わせてもらおうかと思ったものも少なくなかった．

遺伝子とはあまり関係ないがひとつ興味深い話題を紹介したい．第6章「現代の課題」では格差の増大が扱われている．世界の貧困と格差を糾弾するNPOのOxfamによる報告書では，2017年に世界で生み出された富のうち82%が世界の富裕層の上位1%に集中していた．貧困層37億人の富はわずか1%未満しかなかった．さらに2017年度の報告では，世界で最も裕福な8人が貧困層36億人に匹敵する資産をもっているという（評者注：これらの数値については，本書より新しいデータOxfam HP［Oxfam International 2019］を用いた）．

驚くべき現実であるがそれはさておき，著

者はここで人間社会のベースとしては身体的および社会的にどの程度までの格差が認められるか推測する．まず格差のひとつの尺度として 1 日の摂取カロリー量を考えると，その振れ幅はせいぜい基礎代謝量の 3〜4 倍までである．さらに，農耕・牧畜以前の狩猟採集社会では富（身体的富，関係的富，物質的富）の格差も 3 倍程度と推測される．つまり，哲学者のルソーが問題とした自然法が許容する格差の範囲は，生物学的にも社会的にもその程度のものではないかと論じている．この数値はサイエンスとして厳密に考えることはできないが，身体感覚として納得できそうに思う．

中には少々注意すべきところもある．第 4 章の「伝統社会は自然を保護してきたのか」においては，ソロモン諸島の豊かな熱帯林が過去に大きな人為的ダメージを受けてきたという熱帯雨林学者らの論文を紹介し，「現在環境問題になっている森林伐採であるが，かつてはこれと同じくらいの破壊を住民がしてきたのであるから，将来になるとかならずしも破壊的であるとはいえないと述べた」（p. 157）と引用している．誤解を招きかねないところだ．著者もその点に配慮し「ただし，工学的技術が進み，それが途上国にも広がっているため，伝統社会がかつての感覚で自然を破壊していくことが，取り返しのつかないほどの破壊に繋がる可能性もある」（p. 158）と付言しているが，現実的には可能性というよりもすでにそのような状態に落ち込んでいるところが多いだろう．

ジェンダー（社会・文化的性）と生物学的性（sex）との関係も複雑である．第 2 章第 1 節の「性別を連続的に見る」ではジェンダーの連続性が語られた後でミジンコやコモドオオトカゲの生物学的性の話が展開されている．評者の個人的好みとしてはこの部分はたいへん興味深く読ませてもらったが，話の流れとしては，ジェンダーと同じく人の生物学的性についてもどのように連続体なのか説明してほしい．第 6 章第 2 節「『喪われた女性』たちは差別か適応か」では，産卵時の環境条件次第でオス・メスの比率が大きく変わったり，途中で性転換する生物種もあることをもとに，「性とは二項対立ではなく，連続体なものである」（p. 212）と述べられている．ここでは性比の問題とオスとメスの二分法的な生物学的属性が混合しているようだ．人の場合はどうなのかやはり気に掛かる．DSD（性分化疾患）など，生物学的性といえども XY 遺伝子だけでは決まらない問題をとりあげられたらよかったかもしれない．

もっとも本書のなりたちからすると各章各節に割り当てられた紙幅は限られていたので，あまり丁寧な書き方をできなかったのは仕方ない．巻末の引用文献リストも充実しているので，本書を読んで興味をもったり疑問がわいた部分については，自分で積極的に調べてみるとよい．いずれにせよ，冒頭で紹介したように「人間は同じ一つの生物ホモ・サピエンスであり，それが多彩な姿をしめす連続体＝スペクトラムなのだ」という著者のメッセージはたいへんすばらしいものであり，その研究姿勢はおおいに共感を呼ぶだろう．これからの研究の発展に期待したい．

引用文献

Oxfam International. 2019.〈https://www.oxfam.org/en/press-releases/richest-1-percent-bagged-82-percent-wealth-created-last-year-poorest-half-humanity〉(2019.12.12)

河野正治.『権威と礼節―現代ミクロネシアにおける位階称号と身分階層秩序の民族誌』風響社，2019 年，358 p.

紺屋あかり *

本書は，ミクロネシアのポーンペイ島を事例に，近代国家体制下における首長制に伴う位階称号の秩序形成について，対面的相互行為の分析からその過程を明らかにした民族誌である．何よりも本書を特徴づけるのは，「礼を尽くすこと」，そして「返礼すること」というポーンペイの人々による日々のやりとりに対する緻密な分析である．それゆえ本書は，ミクロネシアという地域への関心に限定されることなく，人々の相互行為に眼差しを向ける多くのフィールドワーカーに開かれた同時代的な民族誌となっている．特に本書の事例は，複層化・多層化する現代社会における新たな関係性の構築という検討課題に対して，議論の場を設けている．具体的にいえば，近代と伝統とが入り混ざる場―コンタクトゾーン―において，対面的相互行為がどのような機能をもつのかという問いに対して，現代のポーンペイ島の事例から，礼節をめぐるやりとりを通じて柔軟にフレームを調整していく様が描き出されている．

筆者は，現代のポーンペイ社会の秩序形成においては，異なる 2 つの政治空間の狭間に立ち現れる異質なものがあり，それらが何らかの「ズレ」を生じさせていると言い当てる．ここではその「ズレ」を「あふれ出し」と呼び，ポーンペイの人々はこの「あふれ出し」を，礼節を図ることによって調整していると分析している．2 つの異なる政治が接触することによって生じるコンフリクトは，19 世紀の植民地時代以後のオセアニア社会に多くみられる普遍的な現象である．そのなかで本書が提示した事例―「名誉を認める」というポーンペイ社会の原理においてコンフリクトを調整する様―は，ポーンペイ社会のもつ個別性／独自性の理解を深化させただけでなく，他地域との比較検討の場を開いている．

本書がとるアプローチは，既存研究―伝統的権威論―とは異なっている．それは筆者が述べるように，本書の目的とするところが，位階称号の秩序，ないしは秩序形成を相互行為の次元から捉え直すことであることと深く結びついている．こうした，ポスト植民地国家における政治力学の図式において首長制を論じるのではないという視座が，本書に示された事例の独自性を際立たせている．

本書は第一部「ポスト植民地時代における位階称号と礼節の技法」，第二部「首長の権威と祭宴のポリティクス」の二部構成で，序論，7 つの章，結論から成っている．各部の間には，間奏「『外国人』から『東京のソウリックへ』―称号をもらうまでの道のり」と

* お茶の水女子大学理学部・京都大学東南アジア地域研究研究所

題された副章が添えられている．もっともこの間奏が本書において大変重要な意味をもつことはいうまでもない．なぜならば，筆者の経験を通じて垣間見られた礼節の場が，臨場感をもって記されているからである．

序論「現代ミクロネシアにおける身分階層秩序の民族誌―本書の視座」では，ポスト植民地時代における伝統的権威を政治言説の問題に還元してきた先行研究に対し，伝統的権威者がさまざまなアクターとの関係性のなかで秩序が形成される過程を解明するという本書の目的が示されている．

第一部（第 1 章から第 3 章）では，祭宴における礼節について「名誉を認める」行為が，祭宴の個別的なコンテクストとの関係においてどのような役割を果たしているのかについて論じられている．ここでは，カヴァ飲料の給仕や物財の再分配，それに伴う称号の呼び上げなどの事例を通じて，現代のポーンペイ社会における身分階層秩序の可視化が試みられている．それら事例の検証を通じて，ポスト植民地時代の多元的な価値基準を生きる島民独自の実践論理として，「名誉を認める」という行為が定位されている．

第二部（第 4 章から第 7 章）では，首長制の儀礼実践の場を事例に，首長の権威（ポリティクス）が「政府の側」や「教会の側」と緊張関係や葛藤を生み出す様が論じられている．ここでは，儀礼的貢納（パン果やヤムイモの初物献上も含め）が脱儀礼化する様―儀礼的貢納が実施される時期がズレ込んでいる現象―に焦点を当て，「ポーンペイの仕事（コミュニティへの奉仕活動や首長への献上などの “礼を尽くす仕事” を総称して呼ぶ．本書では，現金獲得のための仕事を「外来の仕事」と呼んで，それと区別している）」自体が変化していく過程が描き出されている．それら事例の検証を通じては，今日の変容する島社会と，2 つの異なる政治とがせめぎあう規範概念の様相が考察されている．

結論では，ポスト植民地時代のポーンペイ島社会の身分階層秩序が，「慣習の側」と「政府の側」のそれぞれを支えるフレームが互いに関係しながら変化する多様で複雑なものであると説明している．これを筆者は，人類学的な「権威と礼節」という主題に対する独自の礼節論として位置づけている．

名誉とは，逆説的に捉えれば，人々から嫉妬や妬みといった激しい情動を誘う．それゆえ時には他者の敵対心を生み出す危険な装置ともなり得る．しかしながら，ポーンペイ社会においては「礼節の技法」と筆者が呼ぶように，名誉のもつその両義的な側面をその都度使い分けることで，他者との関係性が巧みに操作されている．本書に示されたポーンペイ社会における「名誉の承認」からは，当該地域社会を生きるうえでのたしなみとして，対面的相互行為の価値が見出されており，そこからは創造的な人々の営みを観察することができる．このように本書は，現代社会における対面的相互行為について再考を促す，最良の書である．

永井史男・岡本正明・小林　盾編.『東南アジアにおける地方ガバナンスの計量分析―タイ，フィリピン，インドネシアの地方エリートサーベイから』晃洋書房，2019 年，235 p.

松並　潤 *

本書は，タイトルおよび副題からも明らかなように，タイ・フィリピン・インドネシア（ジャワ島のみ）の 3ヵ国において地方エリート（首長・地方官僚のトップ）へのサーベイ（2010 年代初頭，面接調査および郵送法による調査）によって得たデータの分析，そして（タイトル・副題には含まれていない）質的な分析を組み合わせて行なわれた比較研究をとりまとめたものである．執筆者には，3ヵ国それぞれについて第一人者というべき地域研究者と，定量的分析で政治学あるいは社会学の分野で日本の学会をリードしている研究者が加わっており，このサーベイデータを用いて 3ヵ国の地方エリートを分析するための最強のチームを編成できたと思われる．

最初に，本書の構成を確認しておこう．序章を入れると合計 11 章で構成される本書は，まず序章から第 2 章で研究の意義や背景，サーベイ調査の概要を説明するとともに（序章），3ヵ国の地方政治に関する先行研究をまとめ（第 1 章），さらに 3ヵ国の地方分権改革のインパクトを概観している（第 2 章）．続く第Ⅰ部（第 3 章から第 5 章）では，自治体エリートの分析が各国別に行なわれている．そして第Ⅱ部（第 6 章から第 10 章）では，自治体のもつネットワークと自治体のパフォーマンスの関係が，同じく国別に分析され論じられている．

評者は，元来は日本行政の研究者であるが，15 年ほど前に神戸大学大学院国際協力研究科に転じて以降，これら 3ヵ国出身者を含む多くの留学生を研究指導する機会を得た．特に研究者志望で博士号を取得した者は，偶然なのか全員がこの 3ヵ国の出身であり，また，フィリピンとインドネシアについていえば，再教育のために奨学金を得て留学し修士号取得を目指す公務員を多数指導する機会を得ている．彼ら彼女らの書く論文の多くは自国の行政を取り上げており，本書各章の執筆者の書いた文献を参考にしながら指導し，あるいは議論をする中で学生から各国の地方自治・地方政治について多くを学んだ．評者にとって本書は，3ヵ国のサーベイデータを用いた研究であるとともに，今まで得た知識・情報を体系化してくれる文献でもある．まずこれらの点で，地方エリートサーベイを企画し実現した永井史男氏をはじめとする本書の編者および各章の執筆者に感謝したい．

しかしながら，本書にもいくつか気になる点がある．以下，それらを検討したい．第 1 は，「第Ⅰ部 自治体エリートと地方自治」で取り上げられた「地方エリート」の違いである．「地方エリート」を取り上げた章の中には，第 3 章（タイ）・第 4 章（フィリピン）のように首長をみている場合と，第 5 章（インドネシア）のように官僚をみている場合がある．タイの首長に「地方行政」出身者が多

* 神戸大学大学院国際協力研究科

い，あるいはインドネシアにおいて直接選挙導入後（2010–11 年）も地方自治体正副首長に官僚出身者が多い，そして 2016–17 年になると特に首長で減少する（この事実は，知事公選導入直後の日本の歴史にも似ているのが興味深い）という事実があり，また序章ではインドネシアにおいては首長調査をやむなく断念したという経緯が説明されてはあるものの，この違いが 3ヵ国の比較を難しくしていることは否定できない．

同様に，「第Ⅱ部 ネットワーク，住民参加，地方自治」についても，だれ（のネットワーク）を観察・分析対象にするかをめぐって，第 6 章（タイ）・第 8 章（フィリピン）のように首長に着目する場合，第 7 章（フィリピン）のように官僚に着目した場合，第 9 章（インドネシア）のように地元選出議員に着目する場合，第 10 章（インドネシア）のように（官僚からみた）首長・官僚の両方を分析対象としている場合があることが指摘できる．一国でも難しい大規模サーベイ調査を，3ヵ国でほぼ同時に行なったのは，出版から 40 年近く経った現在でもさまざまな文脈で言及されることの多いジョエル・アババックらの比較官僚制研究［Aberbach *et al.* 1981］にも匹敵する大研究だと思うが，半面，*Bureaucrats and Politicians in Western Democracies* の最終章にあたるものがないのは，厳密な意味では比較がまだ不十分であるという編著者たちの判断だろうか．本書の執筆者たちがどのような結論を得たかを明示的には知ることができず，少々もったいない気もした．

さて，本稿は今回出版された著作に対する書評だが，これだけの規模のサーベイを行なったという事実そのもの，そして「あとがき」に永井が書いている本研究の出発点（より詳しくは［平山・永井・木全 2016］）を考えると，本研究に村松岐夫の一連の研究が大きく影響与えていることは明らかである．以下，村松自身の総括ともいえる研究［村松 2010］とそれに対する曽我謙悟の書評［曽我 2010］も参考に，本書そしてその後にかかわるポイントを 2 点指摘して，この書評を終えたい．

第 1 は，サーベイそのものはある時点での事実，本書の場合，地方エリートの権力やその行使のあり方を明らかにするものであるが，1 回の調査で明らかになるのはいわば「静止画」であり，明らかにできることには限界があることである．将来，3ヵ国で 2 回目，3 回目のサーベイを行なうことができれば（複数国でサーベイを継続するのは，村松の数倍のエネルギーを必要とするだろうが），静止画は「動画」になり，より多くの情報を得ることができる．さらにその将来のサーベイにおいて 3ヵ国あるいは他の国の研究者を研究の協力者，分担者そして共同研究者として組み込むことができれば，研究における継続と現地化をはかることが可能となるだろう．

第 2 点は，3ヵ国の研究者との協力にもかかわるが，英語，そしてタイ語ないしインドネシア語での研究の公表の必要性である．これら 3ヵ国には研究水準の高い大学・研究機関も多数存在しており，研究者は基本的には

自国語（フィリピンの場合複雑だが）で講義をしつつ，特に近年，英語で公表する業績を急激に増やしている．彼らを巻き込むことができれば，そして彼らから社会に対して研究成果を還元してもらえれば，本研究は単に3ヵ国の地方エリートの姿を学問的に明らかにしただけでなく，3ヵ国における政治学研究と教育に対しても大きな貢献をしたことになるだろう．

実はこれらの点について，本書の執筆者たちはすでに動き始めていることを，最近になって評者は知ることができた．質的な調査もあわせて，本研究に続く研究がすでに開始されており，国際学会での報告も多数行なわれている．また，国際共著論文や本書の執筆者による英語論文も，公表に向けて努力が重ねられているという．

その意味では，*Bureaucrats and Politicians in Western Democracies* の最終章にあたる比較の章は，たしかに本書にはないが，この研究がさらに発展・拡大する中でまとめられることが期待できる．どのような面白い事実が発見され，それがどのように説明されるのか，今から待ち遠しく思うのは，評者だけではないだろう．

引　用　文　献

Aberbach, Joel D., Robert D. Putnam and Bert A. Rockman, eds. 1981. *Bureaucrats and Politicians in Western Democracies*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

平山修一・永井史男・木全洋一郎．2016.『地方からの国づくり―自治体間協力にかけた日本とタイの15年間の挑戦』佐伯印刷株式会社出版事業部.

村松岐夫．2010.『政官スクラム型リーダーシップの崩壊』東洋経済新報社.

曽我謙悟．2010.「書評　村松岐夫『政官スクラム型リーダーシップの崩壊』」『季刊行政管理研究』130: 63–67.

太田　至・曽我　亨編.『遊牧の思想―人類学がみる激動のアフリカ』昭和堂，2019年，376 p.

橋本栄莉 *

イギリス社会人類学が生んだ「分節リネージ体系」や「秩序ある無政府状態」[e.g. Evans-Pritchard 1940]，エチオピア西南部研究の成果である「戦争と文化装置」[Fukui and Turton eds. 1979] など，東アフリカ牧畜社会における民族誌的研究は，西欧近代が形成してきた固定的・静態的な「民族」観や，「好戦的な野蛮人」というステレオタイプに対する批判的視点を提供してきた．しかしながら，これらの研究成果にもかかわらず，「野蛮」で「伝統に固執」するという牧畜民のステレオタイプは，植民地統治や国家による支配のなかで共有され，現在まで受け継がれてきた．本書の舞台となるのは，西欧近代的思想と，上記のステレオタイプ，そして牧畜社会で共有されてきた知識や実践が混交する現代の東アフリカ社会である．この混沌の時代を，牧畜民たちはどのように生き抜いているのだろうか．執筆者らの粘り強いフィールドワークからみえてきたのは，複数

* 立教大学文学部

の価値規範や実践に翻弄されながらも，それらを使いこなしながら自らの生を紡いでゆく人々の姿である．

本書は序章に加え 15 章，3 部構成となっている．序章では，グローバル化や国家の干渉，気候変動，近代化といった東アフリカの牧畜民が共通して経験する問題と，そのなかで見出された牧畜社会に共通する特徴が示唆される．本書の目的は，東アフリカの牧畜民の生活や考え方の特徴を明らかにするとともに，彼らがいかに変化に向き合い，翻弄されながらも自らの生を紡いでいるかを見出し，そこに存在する「遊牧の思想」を提示することにある．「遊牧の思想」を読み解くヒントとなるのは，牧畜民の「徹底した個人の自主性といさぎよさが，自在に行動する柔軟やしぶとさと複雑に両立している」（p. 10）という特徴である．

第Ⅰ部「牧畜という生き方」では，牧畜民のコミュニケーションや家畜をめぐって形成される人間関係，集団間関係が描かれる．牧畜民の際限のない物乞い（1 章）あるいはねだり（2 章）は，単に個人間の利害をめぐる闘争ではない．それは，「コミュニケーションにコミュニケーションを接続する」（p. 25）という特徴をもつ半永久的なコミュニケーション創造の場であり，個人が一人前の人間となるための社会化の過程であり，それゆえに「社会の秩序」の創出にもつながるものであることが指摘される．家畜の所有（3 章）をめぐる人々のふるまいからは，つねに他者からの交渉の機会にさらされながら存在している「自己の所有権」の在り方がみえてくる．他者との交渉を促す家畜の交易の発展（4 章）は，単なる経済活動ではなく，人間集団同士の信頼関係や協働関係を促進し，難民のセイフティ・ネットワークを形成していた．個人と「その場性」に価値判断の基準を置く牧畜民に対し，農耕民（第 5 章）は，祖霊やパターン化された物語という「外部」を参照しながら不幸の経験を解釈する．

第Ⅱ部「紛争を乗り切る」では，国家権力に対する戦略や暴力に対する牧畜民の対処の方法が描かれる．市場経済と生業経済の併存化や，伝統組織にとらわれない新しい共同体の成立（6 章），そして傷や病の治癒行為を通じて個人と社会の経験を非暴力化する方法（7 章）からは，周縁化された牧畜民たちの創造的営みが見出される．また，戦いの下であっても民族間を越えて存在する個人間の紐帯（8 章）や，在来の「男らしさ」という規範を越えて戦いに向かうことをやめる個人の姿（9 章）からは，共同体の規範を越えた個人の主体的行為の果たす役割が示される．一方，戦後社会を生きる農耕民は，賠償の支払いと因縁の解消という規範を逆手に取り，規範にそって「社会の秩序」の再建を拒否するという態度を取る（10 章）．これらの事例からは，周縁化された牧畜民が時として伝統を捨て，民族を越えたつながりを創り出しながら国家に寄らず，時として利用しつつも自らの生を生きる／生き直す知略と実践が描かれる．

第Ⅲ部「グローバリゼーションに向き合う」では，アフリカを越えた世界規模で展開する運動・プロジェクトや経済活動のなか

で，牧畜民がどのように個々の状況を生き抜いているのかが描かれる．〈外部〉が持ち込む動物愛護の価値と〈地域〉の論理の双方を組み合わせて生きる「便宜的」なマサイ（11章）や，アフリカの牧畜民のステレオタイプを利用しながら観光業に携わり，欧米人女性と「マサイ」として「恋人業」を営むサンブルの人々が最後に行きつく〈地域〉のありよう（12章）からは，グローバルな動きに翻弄されつつ地域社会との結び付きとともに生きる人々の姿がみえる．人々が営むミクロな生業活動からは，生計を維持するための多様な対処戦略（13章）や，親族間で生ずる駆け引きや葛藤（14章）が見出された．そして植民地期以降に整備が試みられた家畜市場の歴史からは，「地域」にも「外部」にも括ることのできない牧畜社会に関与する多様なアクターの存在が指摘される（15章）．以上の事例からは，グローバル，ローカル，そして親族や個々人の思想と行動規範が複雑に入り混じるなかで，それを組み合わせたり使い分けたりしながら目の前の状況と向き合う人々の姿が明らかにされた．

以上のとおり，いずれの論考も，実に多様な牧畜民・農耕民の姿を詳述している．そのユニークさを限られた紙幅で紹介するのは不可能なため，ぜひとも実際に本書を手に取ることをお勧めする．その多様さが「遊牧の思想」を特徴づけるのを困難にしているということもあるが，ひとつの分析概念や理論で語りえぬ事例に目移りしてしまうのもまた，すぐれた民族誌的研究のつねであろう．以下では，社会変容を生きる新たな人間像の提出，実践に基づく思想の抽出方法，そして本書が抱える課題の3点に絞って本書の評価を論じる．

まず功績として挙げられるのは，現代の牧畜社会が周縁化されていった過程が示される一方で，人々自身が自らのイメージを相対化し，文脈や目的に合わせて柔軟にこれらを受け入れたり，回避したり，あるいは逆手に取ったりする様子がありありと描かれている点である．微視的な描写からみえてくる人々の姿は，時代に翻弄される脆弱で受動的なものではなく，かといって過度に主体性が強調された戦略的個人でもない．それは，構築された像とその像からの脱却を同時に生き，受動と能動の間を行き来しながらアフリカの社会変容を生きる人々の新たな姿である．

さらに特筆すべきは，人間の実践の背後にある思想の抽出方法である．本書で描かれているのは，一般に思想という語から想起されるような抽象的な観念世界ではない．執筆者たちが一貫して着目しているのは，ミクロな人間関係や個人の思想，そして人間同士の相互行為や語りの場である．たとえば，社会の規範の生成へとつながる対人コミュニケーション術（1章）や，集合的な問題としての「個人の所有」（3章）は，観念というよりも，あくまでも彼らのプラクティカルな問題として現前し，日々の行為や他者との相互交渉のなかで創造され続けている．すでに共有されている規範を参照するのではなく，その場その場でパフォーマティブに紡がれ，立ち現れては消えるものを「思想」として捉えるのは困難極まりないであろう．これを捉えること

を可能にしたのが，執筆者らが長年にわたって牧畜民たちと築いてきた濃厚な関係である．本書の行間から伝わってくるのは，執筆者らがフィールドで直面した困難や怒り，やるせなさ，そして興奮である．この経験の蓄積から描かれているのは，静態的・抽象的な価値体系ではない，集団として生存するための論理かつ実践として存在する，いわば「生きた思想」であった．

しかしここで疑問として浮かぶのは，本書で「遊牧の思想」として挙げられている人々の特性は，果たして東アフリカ牧畜民「の」ものなのだろうか，という点である．柔軟で融通無碍な態度は，アフリカのみならず激動の時代を生きるあらゆる人間集団に求められるであろうし，このようにふるまうことができた集団だけが現在まで生き延びているということもできよう．たしかにこの特徴は，一部で農耕民との対比で描かれているものの，牧畜民「の」思想と位置付けるためには，さらなる比較検討が必要ではないだろうか．

しかし，だからといって評者は牧畜民特有の思想など存在しないとは考えない．かつてエヴァンズ＝プリチャードが農耕民アザンデと牧畜民ヌエル［Evans-Pritchard 1937, 1956］の民族誌で対比的に描いたように，災いの原因を人間に帰するアザンデと，神に帰するヌエルの間には，たしかな違いをみることができる．その違いを形作るもののひとつが，生業に基づいて築かれる人間関係や人―神関係，そして超自然的な力を経由して形作られる財（農作物，家畜）をめぐる考え方だろう．本書の随所には，人間の窮状や苦境，癒しとともに存在する神的存在への言及が描かれている．牧畜社会では時として家畜と同一視される神的存在や霊観念は，自己と他者の関係や，家畜の所有と分配，そして自集団と他集団，社会変容の受け止め方にも大きな影響を与えているはずである．この点を掘り下げていくことで，「牧畜の思想」に新たな側面を付け加えることができるのではないだろうか．

とはいえ，本書の目的は，牧畜民のユニークネスを描き出すことのみではなく，「私たちの生き方に新たな指針をもたらす」(p. 10) ことでもある．「自己責任」や「自己実現」，そして「自己同一性」など，過剰な自己の在り方に日々苦しめられている私たちにとって，即興的に演出される牧畜民の自我や他者との関係の築き方は，時として息苦しいこの社会で生き残る足掛かりを確かに与えてくれる．

引 用 文 献

Evans-Pritchard, E. E. 1937. *Witchcraft, Oracles and Magic among the Azande*. Oxford: Oxford University Press.

_____. 1940. *The Nuer: A Description of the Modes of Livelihood and Political Institutions of a Nilotic People*. Oxford: Clarendon Press.

_____. 1956. *Nuer Religion*. Oxford: Clarendon Press.

Fukui, K. and D. Turton, eds. 1979. *Warfare among East African Herders*, Senri Ethnological Studies 3. Osaka: National Museum of Ethnology.

細田尚美.『幸運を探すフィリピンの移民たち―冒険・犠牲・祝福の民族誌』明石書店，2019 年，395 p.

長坂　格 *

「ここにいても何も起こらない．だからサパラン［幸運探しを］したんだ.」（p. 10）

これは，著者がフィリピン中部のサマール島からマニラに移動した男性に，「なぜマニラに行ったのか」と聞いたときの返答である．フィリピンからの移民にインタビューをしたことがある者ならば，上の引用と類似した表現を一度ならずとも聞いたことがあるのではないだろうか．私もこれまでフィリピンからの海外移民にずいぶんとインタビューをしてきたが，彼らが移動の理由を語る際に，しばしば「運を試す」という表現を用いていたことが思い起こされる．本書は，このようにフィリピンの人々が移動について語る際に頻出するけれども，本格的な検討がなされてこなかった「運」や「幸運を探す」といった概念を中心に据えて，フィリピンのサマール島の人々の移動およびつながりの諸相を解明しようとする民族誌である．なお，本書では，移民という用語が，国内か国外かを問わず，居住地を移して移動する人という意味で用いられており，この書評でもその用法に従うことにする．

まず，序章，本論である 4 部（8 章），そして終章からなる本書の内容を，コメントを交えつつ紹介しておこう．本書は，フィリピン中部のサマール島のバト村と，マニラ首都圏のバト村出身者が集住する 2 つの地区で，2000 年から 17 年間に渡って行なわれたフィールドワークに基づく．まず序章では，「幸運探しをする人の生活，生きかたを多面的に記述し，かれらのコスモロジーのなかに人の移動を位置づける」（p. 20）こと，そして「神からの祝福とされる幸運という概念」（p. 25）に注目することで，フィリピン低地キリスト教徒社会についての「新しい『つながり』論を試みる」（p. 25）ことという本書の研究目的が，移民研究や東南アジア諸社会の研究との関わりで説明されている．

第一部では，調査地であるサマール島とバト村の人の移動の歴史が論じられている．サマール島については，1950 年代頃からマニラの人口増や貨客船の大型化，斡旋業者の増加により，マニラに移住して家事労働職に就く女性が増加したこと，海外就労が本格的に拡大したのは 2000 年代であったことなど，同島の移動史についての興味深い指摘がなされている（第一章）．バト村については，世帯調査や家族史の聞き取りから，都市部，農村部への求職移動，開拓移動，結婚や教育のための移動などが，時代による変化を伴って広範に行なわれたことが説明されている（第二章）．ここでのサマール島，バト村の人々の移動の歴史的変化の記述とその背景の考察は，フィリピン各地における人口移動現象がかなりの多様性を伴って展開してきたことを具体的に示すものであり，フィリピンの人口移動研究にとって貴重である．

第二部では，本書のキーワードである

* 広島大学大学院総合科学研究科

「幸運探し」と訳される「サパララン」の意味や内容が検討されている．サパララン（*sapalaran*）とは，自らの運命に対してリスクを負って働きかけ，運命を変えていこうとする行為とされる．人の移動は，自らが慣れ親しんだ世界の外にある，危険に満ちているけれども多くの富がある場所に移動して，自らの運命を変えようとするとき，サパララン となる．村人のサパララン としての移動が目指す場所は，1950 年代にマニラが目立つようになり，近年では外国も含まれるという具合に，人々の空間認識の変化とともに変遷し，拡大してきた（第三章）．また実際のサパララン は，偶然与えられる幸運をただ待つというようなものではなく，さまざまな仕事や機会を試したり，日々を生き抜くための術を駆使したりするなど，幸運を得るために絶えず工夫し続ける経験であるという（第四章）．

第三部では，幸運の宗教的社会的側面が考察される．まず第五章では，カトリック信者が多い村での信仰実践が概略され，神などの存在に対して願いを伝えるという祈りの側面が，サパララン の理解にとっても重要となると指摘される．そのうえで，マニラで比較的安定した職を得ることができた女性が，幸運を得た（＝職を得た）ことを神からの「祝福」として語ることに焦点が当てられる．この語りの検討から，人間は慈悲深いとされる神に対して，祈りなどを通じて働きかけることで自らの運命を変えることができると考えられていること，そのような運命の変化は神からの祝福と語られること，そして神からの祝福を得るためには，貧しい人を助けるなど社会的モラルを遵守しなくてはならないとされていること，などが指摘される．

第六章では，移民と故地の家族・親族との関係が検討される．成功した移民たちによる，故地の親族への贈与やフィエスタでの派手な寄付行為は，幸運探しの結果を誇示したいという彼らの欲求に基づくと同時に，自らが「利己的でなく，情に厚い」（p. 236）ことを指す「ブオタン」な人間であることを示す行為でもあるという．また，神が人に対して慈悲深く祝福を与えるように，移民たちも自らが得た幸運を分け与えるべきであり，そうしない場合は「幸運はいずれ逃げていくものと信じられている」（p. 265）という興味深い指摘もなされている．

第四部では，まず移民たちが，親族間の相互扶助と自助努力という相反する 2 つの理念の間で，さまざまに位置取りを行なっている状況が，「複ゲーム状況」という概念を用いて記述分析される．また，富を持たない人々が，噂などを通して，富を得た移民たちの諸行為にコントロールを及ぼしていることも指摘される（第七章）．移民たちが，相反する価値や理念の下で，自らが獲得した富をどの程度，いかに周囲の人々に再配分していくかという主題自体は，移民研究では形を変えながら繰り返し論じられてきたものであり，ここでの論述の独自性はややみえにくい．それら既存の研究との丁寧な比較がなされていれば，あるいは相反する理念の間での移民たちの交渉が，この本の主題である「幸運探し」の概念とどのように絡み合うのかが

掘り下げられているなどすれば，ここでの事例考察がもつオリジナリティはより明瞭となったであろう．

続いて第八章では，マニラの移民二世，マニラの中間層住宅地に引っ越した人々，国際移民を事例として，移民と村とのつながりの持続と断絶の様相がその背景とともに検討されている．移民と故地との関係は一般的に弱まっていくが，その関係は必ずしも完全に失われていくのではなく，島の言語を話せないマニラの移民二世が，親の病気の治癒を願って，突然村のフィエスタに出資した事例からもうかがわれるように，必要となれば活性化されるものであるという．ここでのマニラの移民二世の語りや故郷での諸行為についての記述は，出身地社会と都市移住者の世代を越えた社会的場の展開の一例として，とても興味深い．

終章では，本書で考察してきたサパララン としての移動という「サパララン・モデル」がフィリピンの他の地域にも適用できそうなこと，不確実性が増大するグローバル化時代において「運」などのローカルな概念から移動を考察することがより重要となってくること，村出身の人々のつながりの基礎には神などの存在から与えられる祝福を分け与え，さらにその一部を差し戻すという「祝福の流れを感じあえる関係性」（p. 339）があることといった点が，結論として述べられる．

以上，本書の内容を多少のコメントを挟みつつまとめてみた．本書の主題である「運」や「賭け」については，フィリピンの人々の移動経験の語りに頻出することもあり，フィリピンの移民の研究において，これまでしばしば言及がなされてきた．しかし本書のようにこれらの概念を中心に据えて，一冊の民族誌としてさまざまな角度から論じた研究はこれまでなかった．このように類書にはみられない，「サパララン」や「運」などについての記述分析がふんだんに盛り込まれた本書からは，フィリピンの人々の移動経験に関心をもつ読者は，さまざまな着想や考察のためのヒントを引き出すことができるだろう．かくいう評者も，長く海外で働きながら多くの故地の親族を支援してきたフィリピン人から，親族を助ける理由のひとつとして「私のところに運がきたのだから」という言葉を聞いたことがある．そのときは，その点を掘り下げることができなかったが，著者による，移民による寄付や贈答は「幸運の分け与え」であるという捉え方は，この語りや類似の語りのさらなる探求を促すひとつの仮説として，興味深く読むことができた．

他方で，そのような「運」や「幸運探し」についての考察には，同じフィリピンを調査地とする評者にとって必ずしも説得的とは思われない箇所も見受けられた．たとえばサパララン と祝福の関係について論じた第三部では，幸運が得られたことを神からの祝福と呼ぶ女性の語りに主に依拠して，「祝福は［中略］，神が好感を持つ人に与えるものであるため，人間は，神のような慈悲の心に基づいた分け与えをするモラルに準じた人（ブオタン）であり続けなくてはならない」（p. 26）という人々の考えかたが示されている．しかし，このようなサパララン についての「考え

かた」は，評者には，バト村の人々や移民によるサパラランの経験の「物語」の，有力かもしれないが，ひとつのパターンから導かれたものであるようにみえる．そうだとすれば，さらに著者が述べるように村人の信仰実践が「最も多様性が見られる分野」（p. 194）であるならば，このような，祈り，神の祝福，神の慈悲深さ，宗教的社会的モラルの順守などの要素が特定の様式で結びついた物語以外の，サパラランの経験の語り方は聞かれないのだろうかという疑問が生じる．移民の多様かつ複雑な自己のありようが示されうる移動経験の語りの中で，ひとつの物語のパターンに立脚し，当地の「コスモロジー」と結びつけながら人々の「つながり」のあり方にまで考察をすすめていく本書の論のすすめ方は，「幸運探し」という豊穣な主題の可能性をむしろ狭めているようにもみえてしまう．

以上，類似の調査関心をもつ評者の立場からの本書の分析への違和感なども述べたが，著者が，これまでの移民研究においてあまり取り上げられることがなかった移動する人々の「運」などのローカルな概念に焦点を当てて集中的に論じたことは，移民研究の研究動向へのひとつの挑戦として価値をもつ．人の移動は，常に多層的に構成される社会的，政治経済的諸条件のもとで行なわれるが，それら諸条件と相互に作用しつつも，ローカルな想像力や諸概念が，多かれ少なかれ人の移動を形作ったり，また移動の解釈のし方を方向付けたりすることも確かであろう．ユニークなアプローチで移民現象を解き明かそうとする著者の研究の今後の展開が楽しみである．